

教師を目指す学生のための教育実践

—— 45 年間の教員生活の学びを振り返って ——

辻 誠 一

要旨：著者は、昭和 51 年 4 月より宮城県内の養護学校（特別支援学校）を中心に 38 年間勤務し障害のある子供たちとかかわり、教育の在り方を身をもって学んできた。退職後は、私立高等学校でのスクールカウンセラー 1 年、その後、「行学一如」を教育理念に掲げる本学の教員として教育学部に 6 年間勤務し、教師を目指す多くの学生育成に取り組んできた。

教員生活の終活として、その 45 年間の教師としての多くのエピソードや各種の体験、教育実践等を振り返り、その年代に応じて感じ取った教師にとって大切な「不易」の学びを教育財産としてまとめ、教師を目指す学生に役立つ教育実践の一部を「実践報告」として紹介した。

キーワード：教育実践 教師の学び 振り返り

1 はじめに

著者は、第二の職場として東北福祉大学教育学部に勤務するに当たり、教師を目指す学生育成のために、教師としての在り方や実際の学校現場で役立つ具体的な実践的内容を特別支援教育研究年報（東北福祉大学教育・教職センター）において、「教師を目指す学生に伝えたい実践力 ①～⑤」として、毎年、発信してきた。

今回、教員生活の終活として、著者が初任者時代より現在まで継続して書きためた「らくがき帳（記録ノート）」を基に、45 年間の教師としてのエピソードや各種の体験、教育実践を振り返り、その年代時期に応じて感じ取った教師にとって大切な「不易」の学びを教育財産としてまとめ、教師を目指す学生に少しでも役立つ教育実践の一部を実践報告として紹介する。

著者が新任教諭時代より現在まで継続して書きためた「らくがき帳（記録ノート）」を基に、45 年間の教員生活を振り返り、「不易」の学びを教育財産として紹介することが、実践報告として価値あるものかは疑問ではあるが、著者の拙い経験値が、本物の教師を目指そうとしている学生に少しでも参考になれば幸いである。

2 著者の教員としての歩み

現在までの著者の教員としての経歴は以下の通りである。

- 1) 略歴①：昭和51年4月より平成26年3月末退職まで教職（38年間）
 - (1) 多賀城市立多賀城小学校教諭（3年間）
 - (2) 宮城県立光明養護学校教諭（養護学校義務制から14年間）
 - (3) 宮城県立名取養護学校教諭・中学部主事（2年間）
 - (4) 宮城県特殊教育センター指導主事（4年間）
 - (5) 小学校教頭（大郷町立柏川小学校2年間、大和町立鶴巣小学校2年間）
 - (6) 宮城県教育庁障害児教育室室長補佐（平成15年度より3年間）
 - (7) 宮城県立角田養護学校校長（3年間）
 - (8) 宮城県特別支援教育センター所長（3年間）
 - (9) 宮城県立光明支援学校校長（2年間・平成26年3月末退職）
- 2) 略歴②：平成26年4月より現在まで教員（7年間）
 - (1) 朴沢学園 明成高等学校（生徒指導アドバイザー・平成27年3月末退職）
 - (2) 東北福祉大学教育学部准教授（平成27年4月より現職）

3 宮城県における教員生活（38年間）の学びを振り返って

著者は、昭和51年4月より、宮城県内の小学校を皮切りに、二つの養護学校（特別支援学校）の教員として勤務し、最後は宮城県立光明支援学校の校長として退職するまでの38年間、障害のある子供たちの教育や教師の育成、教育行政に携わり、教育の在り方を身をもって学んできた。

著者の38年間の教員生活を振り返ると、大きく5つに分けられる。

そこで、その5つの区分毎に学校現場等での経験や発信してきた教育実践を振り返り、教師としての著者を成長させたエピソードや学びを紹介する。

1) 新任教諭時代（多賀城市立多賀城小学校：昭和51年4月から3年間）

中学校の体育教師を目指し、保健体育教員免許状しか取得していなかった著者にとって、思いがけない小学校勤務からのスタートとなった。この当時は、音楽、体育、美術の教員採用中学校枠で合格している者は「附則3項」という制度があり、小学校で勤務できたのである。

今考えると、小学校教員免許状のない著者にとって、この多賀城小学校での3年間は、不安いっぱいスタートであったが、貴重な体験となり、著者の教員生活に大きく影響を与える結果となった。

(1) 初任地での過ごし方が、その後の教員としての在り方に大きく影響する。

本学教育学部でも、多くの卒業生が新任教員として4月から教壇に立っている。

教員として採用された卒業生にとって、自分では選べない初任地ではあるが、この初任地での出会いや学びが、その後の教員生活に大きく影響する。

① 忘れられない先輩教師との出会い

その当時、教務主任をしていた先輩教師との出会いが忘れられない。

帰りが遅くなった著者を学校を施錠できず待っていてくれたことが出会いのきっかけであった。それを機会に親子ほど年の離れた先輩教師との交流が始まり、教師としての基本を学ばせてくれた。

特に何度も機会ある毎に叱咤激励され今でも心に残っている3つの言葉がある。先輩教師との出会いとこの3つの言葉に助けられ、何とか教員1年目のスタートを切ることができ、自信を持って子供たちとかかわり、楽しく小学校での3年間を過ごすことができた。

ア 「最初は誰もが初心者。分からないことは先輩に聞く。先輩の授業を真似せよ。」

イ 「子供たちは正直で教師を見抜く。自分の良さ（若さ・体育等）を授業に生かせ。」

ウ 「教師は普段の授業が勝負。日々の授業を大切に実践を常にまとめろ。」

② 自分の得意技（体育）を生かし、自分の居場所を見つける

体育の教師を目指していた著者（小学校免許なし）にとって、小学校での3年生担任は、前途多難なスタートであった。しかし、先輩教師の教えのとおり、休み時間には鉄棒・鬼ごっこ・ドッチボール・縄跳びなど子供たちとよく遊び、子供たちとの信頼関係を築けたような気がする。この信頼関係は日々の授業にも影響し授業の楽しさを味わうことができた。

その後、自分の得意技である「体育」を活かし、廃棄マットを教室に持ち込み遊びの中で器械体操を指導し、その成果を「さかだちっ子学習発表会」で発表した。また、学校内の森を体力づくりに活用するため、子供たちと力を合わせて「ジャングルの森」を作り上げた。

その当時、千人を超す大規模であった多賀城小学校では、280人規模の合同体育や1,600人規模の運動会全体指導を任せられるなど、小学校での著者の居場所を見つけることができたことが幸いだったような気がする。

③ 日々の授業を大切に実践をまとめる

著者が勤務した多賀城市では、市独自の教育論文募集を行っており、各校の多くの先生方が熱心に実践研究に取り組んでいた。

著者も当然、先輩教師の教えもあり、1年目から新任としての取り組み、2年目には仙台管内新任研修会の体育授業提供者としての実践記録を発表した。

3年目には当時教育問題になっていた「現代っ子の姿勢と体力」について科学的分析と実践をまとめ、多賀城市教育論文最優秀賞を受賞したことも忘れられない。

この初任地における3年間で、教師の基盤である日々の授業を大切に心や授業記録から実践をまとめる大切さを学んだ。

その後、当時多賀城小学校に設置されていた「なかよし学級（障害児学級）」の子供たちやその子らの教育に興味を感じ、自分の得意技である体育を生かし、ぜひ障害児教育にチャレンジしたいという思いが強くなった。

毎年4月から新任教師として学校現場に赴任する本学卒業生にとっても、初任地での経験から多くを学び、教師としての基盤を養い、教師としての方向性やビジョンを明確に確立できることを願っている。

2) 養護学校・教諭時代（光明養護学校14年間・名取養護学校2年間）

著者が宮城県立光明養護学校に勤務したのは、奇しくも昭和54年の養護学校義務制（障害児教育の転換期）に当たり、著者の教員生活に多大な影響を与える結果となった。

著者はその当時の訪問・重複部（4年間）を皮切りに小学部（7年間）、高等部及び進路（3年間）と、合計14年間もの長い間、光明養護学校一校で教員生活を過ごし、その後、中学部主事として開校間もない名取養護学校に2年間勤務し多くを学んだ。

特に宮城県立光明養護学校14年間を中心に、教師を目指す学生に役立つエピソードや学びを紹介する。

（1）忘れられない教育信条との出会い（宮城県立光明養護学校）

下記の言葉は、宮城県立光明養護学校の経営方針「光明養護の精神」である。

「よく学ぶ者こそ人の師たり得る」
光明の教育をとおして、人間の尊さと可能性を学び
光明の教育をとおして、教師としての生き甲斐を知り
その子になくてはならない教師となり
光明になくてはならない教師となれ

この教育の本質を言い当てている言葉は、著者の教員生活に大きな影響を与え、退職まで著者の教育信条となり、心に深く刻まれた忘れられない言葉となった。

人生はすべての出会いから始まる。教師の仕事も全てから学び、教師の仕事に自覚と責任を持つことが大切である。

特に特別支援学校教諭を目指している学生に役立つ養護学校・教諭時代（16年間）の大切な学びのいくつかを紹介する。

① 養護学校義務制時代（障害児教育の転換期）

著者が宮城県立光明養護学校に赴任したのは、昭和54年4月であり、前述のとおり障害児教育の転換期である養護学校義務制の時期であった。

それ以前、障害の重い子供たちは、希望しても養護学校に入学できず就学猶予や免除の対象となっていた時代であった。

当然、新しく始まる「重度・重複障害児の教育」に関して、学校も教師自身も全てが手探りの状態で、新たな体制や指導法、教育の在り方を確立させなければならない時代であり、集まった仲間たちは、若手もベテランも使命感と情熱に燃え、切磋琢磨しながら新たな「重度・重複障害児の教育」に取り組んだ。

この時代は3無教育「道（指導法）なし・物なし・予算なし」からの出発であったが、その分、教師が英知を出し合い情熱を燃やし、この大きな転換期に立ち向かい、教師のやり甲斐や生き甲斐を感じた。この養護学校義務制との出会いは著者にとっての大切な財産となり、特に次の2つの視点を学んだ。

ア 仲間との切磋琢磨や共同（協同・協働）作業が信頼関係を深め教師力を高める。

イ 「我以外皆師」である。子供たちや保護者、同僚から学ぶことが教師力を高める。

・子供たちの興味・関心を探り可能性を引き出すために子供たちから学ぶ。

・保護者からも家庭での子供の様子や接し方等の情報を聞き取り学ぶ。

「親と教師は良きパートナーである。」障害児教育では、特に保護者との連携が大切であり、その連携が信頼関係を深める。

・先輩教師から授業づくりや教材づくり等の指導技術を積極的に学ぶ。

「学ぶ」とは、「真似る」ことから始まり、自分の力量を高める第一歩である。

② 「一人一研究」の精神

「よく学ぶ者こそ人の師たり得る」を経営方針に掲げる宮城県立光明養護学校では、伝統的に「一人一研究」の精神を大切に学校全体研究の外に個人ごとの実践研究や事例研究を奨励していた。

初任時代から先輩教師の影響もあり実践研究に取り組んできた著者も、毎年、日々の授業を工夫し、記録を蓄積し、その記録の整理から実践をまとめ、事例研究や実践研究に取り組んだ。当然、学校全体の校内研究も積極的に行われており、全国への発信の窓口である公開研究会（体力の向上・意思交換能力の向上等）や実験学校（体力の向上）、学校体育全国大会仙台大会（障害児部門）への取り組みからも多くを学んだ。

特に著者は、小学部時代に取り組んできた多くの体育実践（文部省科研費研究）を基に公開研究会等でも報告し発信してきた。

（2） 日々の授業を工夫し、記録の累積を事例研究や実践研究に繋げる。

日々の授業の工夫には「教材・教具」の工夫が重要であり、特に特別支援学校の授業においては「教材・教具」の工夫は必要最低条件であり、特別支援教育の原点である。

そして、「教材・教具」の工夫の成果や子供たちの変容を記録として累積し、まとめる努力が教師力向上には大切となる。

著者の強みである体育を生かし、障害のある子供たちの動きづくりを中心として、多くの体育指導に取り組んだ事例から「教材・教具」の工夫とその記録の累積が教師力向上に繋がった教育実践をいくつか紹介する。

① 体育：ころころジャンプの実践から

「ころころジャンプ」の実践は、動きのぎこちない子供たちのタイミングコントロール能力向上の事例研究から始まった実践である。

この実践で作成した段ボールの筒を利用した簡単な「教材・教具」は子供たちの動きを引き出し、また、その実践記録のまとめは、各方面の月刊誌や当時の文部省監修の「体育指導の手引き」にも掲載され、著者の障害児教育へのさらなる動機づけとなった。



図1 体育：ころころジャンプ（変形転がしドッチボール）

② 体育：教具ヤジロペーの実践から

「バランス力を高めるヤジロペー」の実践は、身体意識やバランス能力の向上を目指し、傾斜反応の基礎研究から始まった実践である。

この実践で作成した電線巻きの木材を再利用した「教具ヤジロペー」は、子供たちの興味関心を高めバランス能力向上に繋がった。また、この実践は、傾斜反応の基礎研究から出発し、A君の事例研究へと繋がり、体育の授業づくりにまで発展した三位一体（基礎研究・事例研究・実践研究）の取り組みであった。

この実践のための基礎研究や実践記録のまとめもころころジャンプ同様、各方面の月刊誌に掲載され、障害児教育への想いをさらに強くした。



図2 体育：教具ヤジロペー（バランス力）



図3 「実践ヒントシート 96」

(3) 実践研究の発信から本づくりへ

記録を大切に事例研究や実践研究を発信してきた著者は、その当時、全日本特殊教育研究連盟の機関誌「発達の遅れと教育」を発刊していた日本文化科学社より、図3の若手教師向けの障害児教育入門書である「実践ヒントシート96」を出版することができた。

著者の多くの実践研究の発信から生まれたこの「実践ヒントシート96」は、教師の忙しい仕事の合間を縫っての執筆作業となったが、光明14年間のまとめにも繋がり、青年教師時代の教育財産となり思い出深い本となった。

「教材・教具」の工夫や授業づくりから、子供たちの持っている力の偉大さに驚かされ、教師として、目の前にいる子供たちの成長発達に責任を持ち努力することの大切さを学んだ。

また、実践研究の発信や本づくりからは、記録をまとめ発信する大切さを学び、月刊誌等実践を発信するたびに全国に同じ目標を持ち頑張っている多くの仲間ができた。

光明の経営方針である「その子になくてはならない教師となり、その学校になくてはならない教師となれ」の言葉を追い求めた著者の光明での14年間は、子供たちの可能性や教師としての生き甲斐を見つけ、動機づけを高めた貴重な時代となり、著者の実践力を高めてくれた。

著者の教員生活に大きな影響を与えた光明への想いを綴った「光明」創立50周年記念誌に寄稿した原稿を紹介する。

〈エピソード① 光明創立50周年記念アルバムより抜粋（平成23年9月）〉

「光明」の創立50周年に敬意と感謝を！

宮城県特別支援教育センター所長 辻 誠一

光明の創立50周年に当たり、心からお祝いと感謝を申し上げます。

私が光明養護学校に勤務したのは、奇しくも昭和54年の養護学校義務制の時期。

その当時の訪問・重複部（4年）を皮切りに小学部（7年）、高等部及び進路（3年）と、計14年もの長い間、教員生活を過ごさせて頂いた。

その後の私の人生において、小松島にあったあの「光明」での14年間は、教師としての在り方や生き甲斐など、全てを学んだ思い出深いものとなった。改めて、あの当時の子供たちや保護者、仲間との出会いに感謝し、「光明」という学校の偉大さを痛感している。

今、来月行われる県外での講演会資料を作成している。

その書き出しは、いつも決まって、「光明から学ぶ」の紹介から始まる。

「のぶちゃんが教えてくれたこと！」

「ある先輩教師の授業から学んだこと！」

「一人一研究から学んだこと！」

「よく学ぶ者こそ、人の師たり得る！」の精神

光明から学んだものは、今でも私の全てである。

そして、色あせることなく、尽きることがない。

最後に、創立50周年を迎える光明支援学校にエールを贈り、益々、宮城の特別支援教育をリードし、充実、発展させることを願い、お祝いの言葉とする。

3) 指導主事・教頭・室長補佐時代（中間管理職11年間）

その後、平成7年4月より宮城県特殊教育センター指導主事、小学校2校の教頭、宮城県教育庁障害児教育室の室長補佐として勤務した。

子供たちと向き合い授業づくりや実践研究に明け暮れた楽しかった教員生活19年間とは大きく異なり、中間管理職として、教師の育成や学校運営、県の教育行政に携わり、地域や県全体の視点に立った教育の大切さを身をもって学んだ。

その中のエピソードや学びのいくつかを紹介する。

(1) 「指導主事（行政）はサービスマン」である（県特殊教育センター4年間）

養護学校16年経験した著者は、平成7年4月より宮城県特殊教育センター指導主事として4年間、相談業務や研修業務に携わった。その4年間の経験は学校現場と大きく違い、県全体を見渡し、障害のある子供たちの教育振興のための取り組みであった。また宮城の特殊教育の将来を担う長期研修員の育成にも携わった。

その当時の所長から「指導主事（行政）はサービスマン」であると叱咤激励され、県民の声に耳を傾け、県民ニーズに応じた柔軟な対応の必要性を学んだ。

今でも次の言葉が心に残っている。

① 著者講義録「先達の言葉」より

- ・宮城の特殊教育は「はじめは道がなかった。一人が歩き、みんなが歩いて道はできた。」
- ・我々の仕事は「特殊教育を小さな点の存在から一本の線へ、そして大きな面の存在へ」

② 特殊教育センターの目指す姿：第一号所報H4.1より

- ・この子らのためのセンター ・この子らの教師のためのセンター
- ・この子らの親たちのためのセンター ・この子らと共に暮らす県民のためのセンター

また、この特殊教育センター時代には、著者が編著者となり、その当時の東北の仲間と協力し、10年後の特別支援教育スタート（平成19年4月）のおぼろげな姿を見据え、平成10年7月に明治図書より「気になる子供とのつきあい方」の著書を出版したのも思い出深い。

(2) 教頭職とは心の健康、体力勝負！（大郷町立粕川小2年間、大和町立鶴巣小2年間）

平成11年4月より、著者にとって20年ぶりの小学校（通常の教育）での勤務となり、また校長を補佐する初めての教頭職のため不安いっぱいのスタートであった。

しかし、初任者時代と同様、著者の強みである得意技（逆立ち・蹴上がり・運動）を生かし子

供たちと遊び、また、子供たちと接する著者の姿から、保護者や地域の方々とも信頼関係を築くことができ、忙しいながらも楽しい教頭職4年間を過ごすことができた。

下記に、教師を目指す学生に参考となるその当時の著者の思いや学びを紹介する。

- ① 教頭とは、健康・体力勝負であり、教頭の仕事に雑用雑務はなく、すべてが仕事である。
 - ・特に心の健康と心のタフさが必要である。
- ② 教頭は職員室のコーディネーターである。校長と教職員の関係を円滑に調整する。
- ③ 教頭は保護者や地域の声をしっかり聞き取り、まず信頼獲得が必要条件である。
- ④ 特別支援学校と地域の小・中学校では、研修や研究への意識の差が見られる。
 - ・教職員一人一人の良さを引き出し、研修や研究への意欲を高めることが大切である。
- ⑤ 小・中学校の学校現場から宮城県特殊教育センターを見上げて感じたこと。
 - ・学校現場は常に忙しく、時間も旅費もなく簡単には研修も受けられない。
 - ・もっと学校現場を考えた研修実施の在り方や特殊教育推進方法の検討が必要である。
- ⑥ 「継続は力なり」である。

教頭職激務の中、今までの著作や地域の学校現場から学んだ教育実践を整理し、新しい特別支援教育のスタートに向け、日本文化科学社より「特別支援教育のコツと技」を出版した。

職員が全員帰った後の寂しい職員室で一人、一日2時間の努力は今でも忘れられない。

(3) 特別支援教育のスタート準備時代（県障害児教育室3年間）

小学校2校の教頭職を経験した後、平成15年4月から3年間、宮城県教育庁・障害児教育室で勤務し、主に県全体の新たな特別支援教育の企画推進を担当した。

一度は経験したいと考えていた仕事ではあったが、あまりにも衝撃的であった。

着任した4月1日から新任採用教員の対応や養護学校の転出入事務、教科書採択事務、特別支援教育開始への諸準備、議会対応、苦情処理など、仕事内容が多岐にわたり、責任が重く多忙を極める職場であったことを記憶している。

① 宮城の特別支援教育推進の基礎づくり

その当時、平成19年4月からスタートする特殊教育から特別支援教育への大きな転換期に当たり、著者は何もない白いキャンバスに宮城県のこれからの特別支援教育推進計画を描いていった。推進計画立案実施までの余裕は一年。何度も東京にある文部科学省に通い、その当時の担当者（柘植調査官、石塚調査官）と打ち合わせを繰り返した。今までの著者の教員生活の中で感じたことのない責任と重圧を感じていたが、何とか宮城方式の特別支援教育推進計画を完成させることができた。

あの当時を振り返ると、宮城県の特別支援教育推進計画として、著者が教頭時代勤務した大和町教育委員会の協力を得て、当時の大和町立吉岡小・中学校の2校から特別支援教育推進事業を展開し、そこでの成果を全県へ波及させていったことも記憶に新しい。

あれから10年以上が経過し、特別支援教育も当たり前の大切な教育の視点となり嬉しい限り

である。また、教師を目指す学生にとっても特別支援教育の理解や免許取得が重要となり、時代の変化を痛感している。

あの当時、著者が宮城県内を巡回し使用したその時代を反映した講義資料の一部を紹介する。

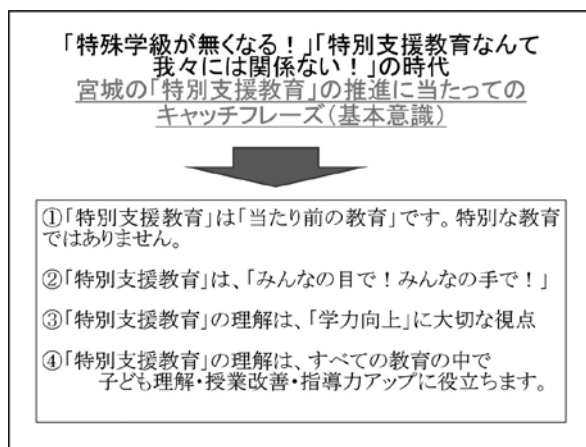


図4 著者講義資料より H16.4

4) 特別支援教育センター所長・校長時代（管理職8年間）

宮城県教育庁・障害児教育室勤務3年の後、初めての校長職として平成18年4月より宮城県立角田養護学校（3年間）、次に総合教育センターへの移転を控えた宮城県特別支援教育センター（3年間）、そして教員生活最終として、宮城県立光明支援学校（2年間）に勤務し退職した。

（1）元気いっぱい・魅力いっぱいの特別支援学校づくりを目指して（角田養護学校長）

その当時、特別支援教育の新たな時代を迎え、特別支援学校のセンター的機能の充実と教職員の専門性のさらなる向上が求められていた。

本校に新任校長として赴任し、転出入職員の多さや特別支援教育未経験の職員の多さに驚かされ、外部へのセンター的機能充実の前に、内部の教師一人ひとりの実践力と自己研鑽力を高め基盤のしっかりした特別支援学校づくりの必要性を痛感した。

そこで、全職員の協力の下、4つの学校経営戦略を掲げ、全職員の特技や個性を生かし「元気いっぱい・魅力いっぱいの特別支援学校づくり」に取り組んだ。

〈4つの学校経営戦略〉

戦略① 課題の共有化と意識化

戦略② 自ら学ぶ教師の育成

戦略③ 挑戦する教師の育成

戦略④ 地域に発信できる教師の育成

その結果、日々の授業改善や特別支援教育の入門書「かくよう入門 Q&A」作成、二年連続の自主公開等の実施、宮城県公務員弘済会研究論文「特別研究奨励賞」2008. 2 に結びつき、意欲あふれる角田養護学校職員の専門性の向上と元気いっぱい・魅力いっぱいの特別支援学校づくりに繋がった。

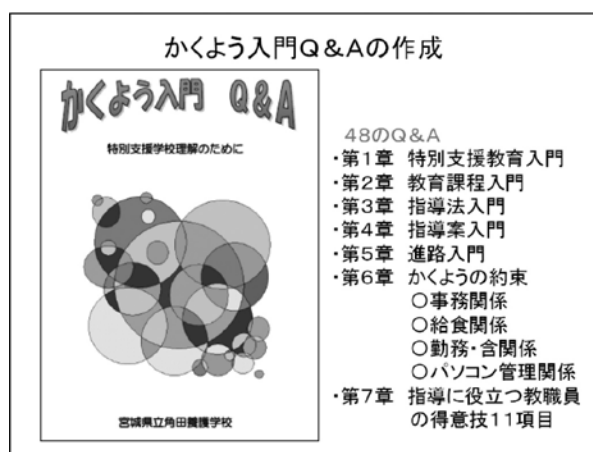


図5 「かくよう入門 Q & A」より H19. 5

(2) 宮城の特別支援教育を担う人材育成を目指して（県特別支援教育センター所長）

宮城県立角田養護学校3年間勤務の後、宮城県にある2つの教育センターの機能を整理・統合し、新たな「宮城県総合教育センター」づくりの使命を受け、平成21年4月より宮城県特別支援教育センター所長として3年間勤務した。

その当時は、著者が宮城県教育委員会時代（平成15年から3年間）に特別支援教育推進事業担当者として、企画運営に携わってきた「特殊教育から特別支援教育へ」の理解を宮城県内にさらに深め、インクルーシブ教育実現に向け、学校現場で活躍できる人材の育成が急務であった。

3年間の特別支援教育センター勤務は、これからの宮城の特別支援教育を担う意欲あふれる若い長期研修員や教師力の高い指導主事との出会いが忘れられない。

その当時、出会った人間力や教師力の高い長期研修員や指導主事の多くが、現在の宮城県の教育を間違いなく支えている。

当時の指導主事と協力して作成した学習指導案作成の手引き「教師のためのサポートブックⅡ 学習指導案を書こう」や長期研修員の研究指導のために著者が作成した『子供を見つめる「事例研究」の進め方』、本県教育に対する思いを綴った当時のHP挨拶（エピソード②）が、今でも鮮明に思い出される。

〈エピソード② 宮城県特別支援教育センター HP（平成21年4月）より〉

所長あいさつ

辻 誠一

宮城県特別支援教育センターのホームページへようこそ。

私にとって、約十年ぶりの古巣（宮城県特別支援教育センター）での勤務となった。

この間、宮城県内の小学校の教頭（4年）・県教育委員会の指導主事（3年）・県立特別支援学校の校長（3年）として、多くの子供たちや保護者、職員の皆様に支えられ、沢山の貴重な経験をさせていただいた。

この十年の間に、障害児教育は、特殊教育から特別支援教育へと大きく姿を変え、養護学校のあり方も、障害種別に応じた学校から、多様な障害種に対応できる特別支援学校へと内容や名称までも大きく変化してきた。

しかし、時代が変わり教育のあり方が大きく変わろうとも、システムの変化だけに目を奪われることなく、教育の本質を見定め今まで培ってきた障害児教育のノウハウを大切に、それを基盤に特別支援教育をさらに発展させることが重要だと考える。

特別支援教育（障害児教育）の基本は、いつの時代も子供一人一人のニーズに応じ教育的支援を工夫し、日々の授業を大切に、その子の人生を充実させることである。

そのためには、すべての教師が、プロの教師としての自覚を持ち、感性を磨き力量を高める努力が必要である。

「感性豊かなプロの教師」は、子供たちの良さを引き出し、日々の学校生活や授業を充実させることができる。

本センターでは、指導主事こそ「明るく・元気に！」をモットーに、県内のすべての子供たちの幸せを願い、研修事業や教育相談事業、広報啓発事業等を推進し、一人でも多く「感性豊かなプロの教師」を育成できるよう努力していきたい。

どうぞ、今年度も本センターへのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（3）新たな時代の特別支援学校を目指して（光明支援学校長）

著者の教員生活最後の締めくくりとして、平成24年4月より、宮城県立光明支援学校（新校舎：南中山）に勤務した。

著者が青年教師時代、全てを学んだ光明（旧校舎：小松島）の校長として、恩返しの意味を含め、新たな時代の特別支援学校づくりに挑戦しようという夢を持つての着任であった。

しかし、その当時、本校は児童生徒数350名、職員数214名という全国でも屈指の大規模校となっており、毎日が子供たちや職員の事件・事故処理に追われ、職員室には教師があふれ、校舎

も狭隘化し、課題の多い学校となっていた。

そこで、教職員の協力の下、課題を整理し退職までの2年間で著者が実施可能な下記の内容に取り組んだ。

- ① 希望者を集めての特別支援教育（障害児教育）の研修会実施
 - ・教育課程の考え方や指導・支援の方法等についての研修会
- ② 開かれた教育課程づくり
 - ・教科等を合わせた指導の整理（当時、光明で行っていた「生活学習」の見直し）
 - ・三学期制を見直し二学期制へ（兄弟が通っている近隣学校との整合性）
 - ・学習指導案の手引き書である「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」の作成
- ③ 狭隘化に対応しての各種準備
 - ・一年だけの長命ヶ丘分教室開校及び閉校準備
 - ・特別支援教育センター跡地への小学部移転準備
 - ・新小松島支援学校の開校準備（光明から82名の児童生徒の転学）等

学校課題に追われあつという間の2年間であったが、この時ほど、支えてくれた仲間の大切さや心の健康の大切さを痛感した時期はなかった。

やはり学校経営の基本は、校長の「目配り・気配り・心配り」であり、学校経営に当たる校長こそ「温かな目と手と心」が一番必要であることを学んだ2年間となった。

最後に著者の38年間の教師の学びと感謝を綴った退職挨拶を紹介する。

〈エピソード③ 著者の退職挨拶より（平成26年4月）〉

— 38年間の教員生活に感謝—

この度、3月末日をもって宮城県立光明支援学校を最後に定年退職した。

昭和51年4月、多賀城小学校を振り出しに、昭和54年の養護学校義務制時期に私の教員としての生き方に大きく影響を与えた障害児教育と出会い、光明養護学校・名取養護学校・県特殊教育センター・大郷町立粕川小学校・大和町立鶴巣小学校・県障害児教育室・角田養護学校・県特別支援教育センター・光明支援学校と楽しく充実した38年間の教員生活を全うすることができた。

これもひとえに障害に負けず笑顔で頑張っている多くの子供たちから元気をもらい、先輩や同僚、保護者や地域の皆様からたくさんのご支援とご協力をいただいた賜と心より感謝申し上げます。

今後も私の大好きな言葉である「挑戦」「温かな目と手と心で」の精神を忘れず、微力ながら第二の人生をゆっくりとじっくりと歩んでいく所存である。

最後にこれまでのすべての出会いに感謝し、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

4 退職後の教員生活（私立高等学校1年・東北福祉大学6年）の学びを振り返って

退職後は、私立高等学校でのスクールカウンセラー1年、その後、「行学一如」を教育理念に掲げる本学の教員として教育学部に6年間勤務し、教師を目指す多くの学生の育成に取り組んできた。特に本学の教員としての6年間を振り返り、その学びを紹介する。

1) 「本学との出会い」からの学び

(1) 本学の教員となって

38年間の教員生活を終え、縁あって平成27年4月から、本学の教員となり、日々、学生から元気をもらい、本学の建学精神にふれ、新しい自分を発見しながら、毎日を新鮮な気持ちで楽しく勤務させていただいている。

早朝からキャンパスに響く、身の引き締まる読経、心安らぐ庭園と禅堂、法堂、心待ちにしている小冊子「禅の友」など、苦情処理等に追われた教員生活とは違った穏やかな生活となり、ふと自分の周りに目を注げる心の余裕が生まれた。

本学、学生、禅の心等 全ての新しい出会いに感謝している。

(2) 永平寺での宗門研修会に参加して（初年度研修）

毎日、何気なく自宅の仏壇に線香を手向ける程度で、宗教について深く考える余裕もなく生活してきたが、本学との出会いをとおり、ぜひ参加したいと願っていた永平寺での宗門関係学校教職員研修会であった。

還暦を過ぎた身には厳しい日程だったが、研修会は予想どおり、非日常の体験をとおり、静寂と向き合い、食と向き合い、自分の心と向き合い、ありのままの姿の大切さを学び、下記のようなすばらしい体験となった。

① 荘厳な永平寺との出会い

・荘厳で重々しい中に、温かみと心の安らぎを感じる場所であった

② 心に響く基調講演「禅の心」

・誰もが理解しやすい「無とは」「空とは」「生とは」の講演であり、著者の目指す特別支援教育の将来の姿とも重なり合っているような印象を受けた。

③ 班別討議での仲間との出会い

・各大学の現状を知り、仲間との楽しい一時となった。

④ 初めての薬石や座禅 等

・命をいただく食の大切さや所作の大切さ、心を見つめる時間の必要性等、著者にかけていた人間としてのあるべき姿を学んだ。

(3) 「行学一如」の精神から

特に本学の教師を目指す学生は、ボランティア活動にも積極的な学生が多く、「行学一如」の

精神の基、学びを実践に繋げていると感じている。

著者の本学（教育学部）での使命は、著者の38年間の教員生活の具体的な学びの中から大切な「不易と流行」を伝えることであり、学生一人一人の良さを引き出し、学生の人間力や教師力をさらに高め育てることだと考えている。

本学に着任し、まず著者の38年間の教員生活を振り返り、学びの中から教師を目指す学生にとって大切な特別支援教育に関する内容をまとめ、教科書づくり「学生・若手教師のための（実践）特別支援教育テキストブック」から取り組んだ。

（4）辻ゼミの学生との出会いから

毎年、著者は全体ゼミ説明会で次の内容から説明を始める。

① 著者の専門分野は特別支援教育（特に知的障害児教育）である。

※不思議なことに、体育の教師を目指していた。

② 辻ゼミ（2年・3年・4年）の目標

・障害理解を深め、実践力のある社会人や教師（特別支援教育）を目指す。

③ 辻ゼミのキーワード（4つ）

・障害理解 ・特別支援教育 ・教師力（社会人力） ・実践力

④ 38年間の教職経験を生かし、すべての学生の皆さんを応援する。

・途中からの参加も歓迎する。（一般企業・公務員志望の学生もいる。）

・特別支援学校の行事等の見学を行い経験を深める。

この6年間で、辻ゼミ卒業生は91名となり、多くの学生との出会いに感謝している。

辻ゼミ卒業生91名の卒業後の進路は様々であるが、著者の学びに影響され、「温かな目と手と心」の精神を忘れず、多くの学生が、実践力の高い教員として学校現場で活躍していることを誇りに思っている。

（5）本学での教育研究（研究ノート・提言）の発信から

著者は、平成27年度より微力ではあるが、5年連続で「教師を目指す学生に伝えたい実践力①～⑤」として、毎年、学校現場で実際に役立つ具体的なテーマを掲げ、東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報（研究ノート・提言）に発信してきた。

平成27年度は著者の教員生活を振り返り教育信条の在り方、平成28年度は一年間を見通す子供理解について、平成29年度は初めての特別支援教育担当としての心得、平成30年度は教師力向上のための四つの視点、令和元年度は職員会議の校長資料から指導・支援のコツ①である。

この著者が発信してきた学校現場で役立つの具体的な内容が、教師を目指す学生の実践力や教師

力向上のために少しでも役立つことを願っている。

5 45年間の教員生活の学びのまとめとして

著者の45年間の教員生活の学びを振り返ると、その年代毎の職務に応じ、身に付けなければならない沢山の指導技術や心構えがあったように感じる。

宮城県教育委員会では、平成30年3月、「みやぎの教員に求められる資質能力」を整理し、教師の5つのライフステージ（新規採用時・基礎形成期・資質成長期・資質充実期・深化発展期）に応じた教員像を設定した。そして、そのライフステージに共通する資質を「教員としての使命感、教育的愛情を深め、広く豊かな教養や人間性を磨く」と定義した。

著者のライフステージ毎の学びを総括しても、やはり全てのライフステージに共通したいくつかの大切な視点があったような気がする。

45年間の学びのまとめとして、著者が新任教諭時代から管理職の立場まで、常に心に刻み、ずっと変わらず目標としてきた次の教師像を紹介し、本稿のまとめとする。

- 1) 教育への情熱を持ち続ける教師になるための視点
 - (1) 新任当時の柔軟で若い心をいつまでも忘れず、吸収力が高い教師
 - (2) しっかりと自分と向き合い、自分の弱みや強みを自覚し、努力できる教師
 - (3) 「明るく・元気に・仲良く・よく学ぶ」を目標にできる教師
 - (4) 子供たちを常に大切に考え、接することができる教師
- 2) 自己研鑽力を高め、学び続ける教師になるための視点
 - (1) 真摯な心で全てから学び、探究心を持つ教師
 - (2) 子供たちや保護者、同僚から学び、教育に活かせる教師
 - (3) 次の3つの（め）「やさしい目・するどい眼・伸びようとする芽」を大切にできる教師
やさしい目：子供の心の声に耳を傾け愛情を持って接することができる目
するどい眼：子供たちの実態や個々のニーズを奥深く見抜く眼
伸びようとする芽：自分自身こそ教師として成長しようとする芽
 - (4) 日頃からアンテナを高く情報を収集整理し「不易と流行」から学ぶ教師
- 3) 日々の授業を大切に工夫改善し、学び続ける教師になるための視点
 - (1) 授業の指導記録を累積し、その結果を次の授業に活かせる教師
 - (2) 事例研究や実践研究へ挑戦し、そのまとめを外部へ発信できる教師
 - (3) 管理職として、若手教師の実践を温かく見守り、適切な指導助言ができる教師
- 4) たくましく豊かな人間性を持つ教師になるための視点
 - (1) いつまでも感動する心や感謝する心を忘れず、教育信条を確立できる教師
 - (2) 管理職こそ「温かな目と手と心」を持ち、子供や保護者、同僚に信頼される教師

- (3) 一人で孤立することなく仲間づくりができる教師
- (4) 広い視点、視野に立ち、物事の本質を見定め、課題解決力の高い教師
- (5) 仕事の多さや多忙感に目を奪われることなく、段取りよく計画的に実践できる教師

6 お わ り に

この45年間の教員生活の中で、そのライフステージ毎に著者の教師力を高めてくれた数多くの出会いと学びがあった。この著者の拙い教育実践と学びの発信が、本物の教師を目指す学生に少しでも役立てば幸いである。

本学では、毎年多くの学生が教員採用試験に合格し、4月から教師としての第一歩を踏み出している。

その学生の多くが、教師を目指す理由として、自分の人生を変えてくれた印象深い恩師との出会いを口にする。ぜひ教師を目指す学生には、いつの日か本物の教師となって、一人でも多くの教え子の心を揺さぶり目標とされる人間力の高い教師になることを期待している。

どんなに時代が変化しようとも「教育も人生も人なり」である。そして、教師として大切な教育信条及び教育哲学は、前述のとおり私の45年間の教員生活を支え続けてくれた「光明養護の精神」だと確信している。

「よく学ぶ者こそ人の師たり得る」
光明の教育をとおして、人間の尊さと可能性を学び
光明の教育をとおして、教師としての生き甲斐を知り
その子になくてはならない教師となり
光明になくてはならない教師となれ

今回、教師を目指す学生のための教育実践として、著者の45年間の教員生活の学びを振り返り、教員生活の終活として、著者自身の歩みと向き合い、「教師とは何か」「教師の実践とは何か」「教育哲学とは何か」を改めて考えることができた。

最後に著者の45年間の教員生活の中で出会った多くの子供たちや保護者、同僚、そして、学ばせていただいた全ての出会いに心から感謝申し上げる。

参 考 文 献

梶田正己 (2004) 「授業の知 (学校と大学の教育改革)」有斐閣選書

田原恭藏・林勲（2013）「教育概論5訂版」法律文化社

河村茂雄（2005）「教師力・教師として生きるヒント」誠信書房

村田昇序・吉永幸司（2006）「よさを生かす教師力・授業力・実践力」明治図書

宮城県教育委員会ホームページ「みやぎの教員に求められる資質能力」

<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/ky-teacher/shihyo.html>

辻誠一（2008）「改訂・特別支援教育のコツと技」日本文化科学社

辻誠一（2017）「実践・特別支援教育テキストブック」教育開発研究所

辻誠一（2006/4～2009/3）「宮城県立角田養護学校・職員会校長資料」

辻誠一（2012/4～2014/3）「宮城県立光明支援学校・職員会校長資料」

辻誠一（2011）「教師力向上のための四つの視点」県特別支援教育センター広報誌「燦々」

辻誠一（2016）教師を目指す学生に伝えたい実践力① 私の38年間の教員生活を振り返って 特別支援教育研究年報第8号 103-107

辻誠一（2017）教師を目指す学生に伝えたい実践力② 一年間を見通す子供理解 特別支援教育研究年報第9号 125-133

辻誠一（2018）教師を目指す学生に伝えたい実践力③ 初めての特別支援教育担当としての心得 特別支援教育研究年報第10号 113-117

辻誠一（2019）教師を目指す学生に伝えたい実践力④ 教師力」向上のための四つの視点 特別支援教育研究年報第11号 111-118

辻誠一（2020）教師を目指す学生に伝えたい実践力⑤ 職員会議・校長資料「指導・支援のコツ①」より 特別支援教育研究年報第12号 77-85